

## 懷感の生没年代

村上 真 瑞

『釋淨土群疑論』を研究するに当たって、その撰述者がいかなる時代に生存していたのであるかを知ることが、その後の歴史的、社会的背景をもとにして、その思想の成立している根源、基盤を考察するために欠くことのできないことである。そこで懷感の伝記に基づき生没年代を考察してみたい。

先ず唐代の貞元年中（A. D. 七八五～八〇五）の撰述である、文諡、少康共撰『西方淨土瑞應刪傳』によると、

### 感法師第十七

感法師<sup>ハ</sup>居<sup>ス</sup>長安千福寺<sup>ニ</sup>。博<sup>ク</sup>通<sup>ズ</sup>經典<sup>ニ</sup>。不<sup>レ</sup>信<sup>セ</sup>念佛<sup>ヲ</sup>。問<sup>テ</sup>善導和尚<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>。念佛之事如何<sup>ナル</sup>門<sup>ヤ</sup>。答<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>。君能<sup>ク</sup>專<sup>ラ</sup>念佛<sup>セヨ</sup>。當<sup>ニ</sup>自<sup>カラ</sup>有<sup>ル</sup>證<sup>。</sup>又問<sup>フ</sup>。頗<sup>ル</sup>見<sup>ル</sup>佛<sup>ヲ</sup>否<sup>ヤ</sup>。師曰<sup>ク</sup>。佛語何<sup>ソ</sup>可<sup>ケン</sup>疑<sup>フ</sup>哉。遂<sup>ニ</sup>三七日入<sup>テ</sup>道場<sup>ニ</sup>。未<sup>ダ</sup>有<sup>ラ</sup>其<sup>ベシ</sup>之應<sup>。</sup>自<sup>ラ</sup>恨<sup>ミテ</sup>罪<sup>ノ</sup>深<sup>キ</sup>。故<sup>ニ</sup>絶<sup>シテ</sup>食<sup>ヲ</sup>畢<sup>ラントス</sup>。命<sup>ヲ</sup>。師止<sup>メテ</sup>而不<sup>レ</sup>許<sup>サ</sup>。三年專<sup>ラ</sup>志<sup>シ</sup>。遂<sup>ニ</sup>得<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>佛<sup>ノ</sup>金色ノ玉毫<sup>ヲ</sup>。證<sup>ニ</sup>得<sup>セリ</sup>三昧<sup>ヲ</sup>。乃<sup>チ</sup>自<sup>ラ</sup>造<sup>リ</sup>往生決疑論七卷<sup>ヲ</sup>。臨終<sup>ニ</sup>佛迎<sup>ヘテ</sup>。合掌西來<sup>シ</sup>或向<sup>ヒテ</sup>西<sup>ニ</sup>卒<sup>ス</sup>。（一）

と示されるように、懷感が長安の千福寺に住していたこと、三昧発得したこと、『釋淨土群疑論』を撰述したことなどが明確に表されている。

次に (A・D・九八二から A・D・九八八) 年の成立である、賛寧撰述『宋高僧傳』巻第六によると、  
唐京師千福寺懷感傳

釋懷感。不<sub>レ</sub>知<sub>ラ</sub>二何許人<sub>一</sub>カヲ<sub>一</sub>也。秉<sub>二</sub>持<sub>レ</sub>シテ<sub>二</sub>強<sub>キ</sub>捍<sub>ム</sub>テ<sub>一</sub>精苦<sub>四</sub>シテ從<sub>ヘドモ</sub>レ師<sub>二</sub>。義不<sub>二</sub>入<sub>レ</sub>神<sub>一</sub>未<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>テ爲<sub>サ</sub>得<sub>ル</sub>ヲ。四方ノ同好<sub>六</sub>就<sub>ス</sub>二霧市<sub>一</sub>ヲ。唯<sub>ダ</sub>不<sub>レ</sub>信<sub>セ</sub>三念佛少時ノ逕<sub>ニ</sub>生<sub>ズル</sub>ヲ<sub>二</sub>安養<sub>一</sub>。疑<sub>ハ</sub>永<sub>サ</sub>未<sub>ダ</sub>レ<sub>レ</sub>津<sub>ト</sub>ケ<sub>七</sub>遂<sub>ニ</sub>謁<sub>ス</sub>二善導<sub>一</sub>ニ<sub>一</sub>用<sub>チ</sub>決<sub>ス</sub>二猶豫<sub>一</sub>ヲ。導曰ク。子傳<sub>ヘ</sub>レ教<sub>ラ</sub>度<sub>ス</sub>ニ<sub>レ</sub>人<sub>ヲ</sub>。爲<sub>シ</sub>二信<sub>ノ</sub>後<sub>チ</sub>ニ講<sub>ストヤ</sub>一爲<sub>シ</sub>二渺茫<sub>ト</sub>シテ<sub>六</sub>無<sub>シ</sub>トヤ<sub>レ</sub>詣<sub>ル</sub>ヲ<sub>二</sub>。感曰ク。諸佛ノ誠言不<sub>レ</sub>信<sub>セ</sub>不<sub>レ</sub>講<sub>セ</sub>。導曰ク。若<sub>シ</sub>如<sub>ク</sub>バ<sub>二</sub>所見<sub>ノ</sub>一令<sub>メ</sub>ヨ<sub>二</sub>念佛往生<sub>一</sub>セ。豈<sub>ニ</sub>是<sub>レ</sub>魔說<sub>ナリヤ</sub>耶。子若<sub>シ</sub>信<sub>ゼ</sub>バ<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>至<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>念佛<sub>シテ</sub>當<sub>ニ</sub>有<sub>ル</sub>二證驗<sub>一</sub>。乃<sub>チ</sub>入<sub>リテ</sub>道場<sub>ニ</sub>一三七日不<sub>レ</sub>觀<sub>ニ</sub>靈瑞<sub>一</sub>。感自<sub>カラ</sub>恨<sub>ミ</sub>テ罪障ノ深<sub>キ</sub>ヲ。欲<sub>ス</sub>二絶<sub>テ</sub>食<sub>ヲ</sub>畢<sub>ント</sub>レ命<sub>ヲ</sub>。導不<sub>レ</sub>許<sub>サ</sub>。遂<sub>ニ</sub>令<sub>メ</sub>テ<sub>二</sub>精虔<sub>ニ</sub>シテ<sub>二</sub>三<sub>一</sub>年念<sub>ジ</sub>レ佛<sub>ヲ</sub>。後忽<sub>チ</sub>感<sub>ズ</sub>二靈瑞<sub>一</sub>。見<sub>テ</sub>二金色ノ玉毫<sub>一</sub>便<sub>チ</sub>證<sub>ス</sub>二念佛三昧<sub>一</sub>。悲<sub>ヒ</sub>三恨<sub>ス</sub>宿垢ノ業重<sub>ク</sub>安<sub>ニ</sub>シテ<sub>二</sub>構<sub>フ</sub>ヲ<sub>二</sub>衆<sub>一</sub>愆<sub>ヲ</sub>一懺悔發露<sub>シテ</sub>。乃<sub>チ</sub>述<sub>ス</sub>二決疑論七卷<sub>一</sub>。即<sub>チ</sub>群疑論<sub>是</sub>ナリ也。臨<sub>ミ</sub>レ終<sub>ニ</sub>果有<sub>リテ</sub>二化佛<sub>一</sub>來迎<sub>ス</sub>。合掌<sub>シテ</sub>面<sub>シテ</sub>西<sub>ニ</sub>而<sub>チ</sub>往<sub>ク</sub>矣。一四

資料はないように思われる。

次に南宋咸淳五年 (A・D・一二六九) 撰述の志盤の『佛祖統記』によると  
懷感。居<sub>ス</sub>二長安千福寺<sub>一</sub>念佛三年。見<sub>テ</sub>二佛ノ金色ノ玉毫<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>入<sub>ル</sub>二三昧<sub>一</sub>。乃<sub>チ</sub>製<sub>ス</sub>二決疑論七卷<sub>一</sub>。臨終<sub>ニ</sub>見<sub>テ</sub>二佛ノ來迎<sub>一</sub>。合掌<sub>シテ</sub>而<sub>チ</sub>化<sub>ス</sub>。一五  
と記されている。これも『往生西方淨土瑞應刪傳』等の系列のものである。

次に明萬曆十二年 (A・D・一五八四) 撰述、株宏の『往生集』巻第一によると

## 懷感

唐ノ懷感。居スニ長安千福寺ニ。入リテニ念佛道場ニ。三七日不レ觀ニ靈瑞ヲ。自カラ恨ミテニ障深キヲ。欲スニ絶チテ食ヲ畢ラントレ命ヲ。善導大師不レ許サ。勸ムルニ令ムニ精虔三載セ。感如クスレ所ノ教フル。後ニ見テニ佛ノ金色ノ玉毫ヲ。得ニ念佛三昧ヲ。製スニ決疑論七卷ヲ。臨終ニ合掌シテ云ク。佛來ニ迎ス我ヲ。遂ニ卒ス。(一六)

と述べられる。これも『往生西方淨土瑞應刪傳』の域を出るものではない。したがって以上の資料からは、懷感の出生地、年齢、没年等は一切わからない。『淨土宗經論章疏錄』卷上には、

懷感禪師 唐景龍二年六月三十日寂 (一七)

とされている。唐景龍二年とは、A・D・七〇八年である。しかしこの年であるという他の資料による根拠は残念ながら見いだされない。

また、智演(澄圓A・D・一二九〇―一三七二)の『夢中松風論』卷第三によると

懷感法師ハ玄契三藏門人。達者七十二人ノ其一ツ也。瑜伽唯識ノ門ニ長ジ。五法三性ノ極談ニ達セリ。シカアルニ。後ニ光明大師ニ値ヒ奉リテ。稟ニ承淨土教ニ。三ケ年ノ間念佛シテ。忽ニ靈瑞ヲ感ジ。金色ノ玉毫ヲ見テ。念佛三昧ヲ證シ給ヘリ。(一八)

と説かれているが、玄奘の達者七十二人の一人であつたという他の資料は見出されない。

そこで、塚本善隆博士の説(一九)によると、『金石萃編』第八六に納められている「大唐實際寺故寺主懷惲奉勅贈隆闡大法師碑銘」(二〇)によって、次のように記されている。この碑文ついてはすでに牧田諦亮博士が『淨土佛教の思想』五・善導(二二)において翻訳されている。ご教示いただくことがはなは多く大変参考になった。牧田博士には心から感謝申し上げる。

隆闡法師ノ碑

大唐實際寺故寺主懷憚奉勅シテ贈ラレシニ隆闡大法師ヲ一碑銘竝ビニ序、懷憚及フレ書スニ

・・・（上略）法師、諱ハ懷憚俗ハ張姓南陽ノ人ナリ也・・・（中略）（高宗ハ）總章元載（A. D. 六六八）夢ニ親テ二法師ヲ一、  
 條ニ降シテ二綸言ヲ一遠ケテ令ヲ虔シデ辟ク。於テ是ニ臨ミ二丹檻ニ一邇ゾケニ青蒲ヲ一、廣ク獻ジテ二眞誠ヲ一特リ蒙ルニ褒讃ヲ一。  
 帝ハ乃チ親シク授ケニ朱紱ヲ一令ムレ處ニ鳳池ノ之榮ニ。師乃チ固ク請イニ緇衣ヲ一願ヒレ託スルヲ二鸚林之地ニ一、奉勅シテ於テ二西  
 明一剃落ス。・・・時ニ有リニ親證三昧大德善導闡梨一。慈樹森疎シ悲花照灼ス。情ノ祛キニ漏ヲ一擁シテ二藤井ヲ一於蓮臺ニ  
 叡化無涯ナリ。駟セルニ鐵圍ニ一於テ二寶國ニ一。既ニ聞キニ盛烈ヲ一、雅リ締ビニ師資ヲ一、祈リニ解脱ノ規ヲ一、發ニ苦提ヲ一願フ。  
 一タビ承テ二妙旨ヲ一十有餘齡ナリ。祕偈、眞乘親シク蒙ルニ付屬ヲ一。自カラ惟ヒニ薄祐ナルヲ一、師資早ク喪フ。想フコトレ遺ヲ烈シ。  
 而シテ崩レ心、顧ミテ二餘恩ヲ一而雨ラシレ面ニ、爰ニ思ヒ宅ヲ、圭式建ツニ墳塋ヲ一。遂ニ於テ二鳳城ノ南神和原ニ一。崇クスニ靈  
 塔ヲ一也。其ノ地、前ハ終峯ノ之南鎮、後ハ帝城ノ之北里ナリ。・・・於テ二塔ノ側ニ一廣ク構フニ伽藍ヲ一。・・・又於テ二寺院ニ一  
 造ルニ大窳堵波塔ヲ一。周廻二百歩、直上一十三級ナリ。・・・奉永昌元年（A. D. 六八九）勅ニヨリ徵シテ二法師ヲ一爲スニ  
 寺主ト。於テ是ニ綱ニ紀シ僧徒ヲ一、規ニ摸シ釋族ヲ一緇門濟濟タリ。・・・廣ク勸メテ二有縁ヲ一、奉ジテ爲ニ二九重ノ萬乘ニ  
 四生六趣ノ一造ルニ淨土堂ヲ一。一所トシテ莫クレナルコト。二虬ノ棟凌セビ虛ヲ一。虹ノ梁ハ架リ廻ルニ二丹檻ヲ一、絶キ日、青瓊延ブレ  
 風ヲ。・・・圓瑠方鏡ノ之奇極メニ人天ノ之巧妙ヲ一。又於テ二堂内ニ一、造リニ阿彌陀佛及ビ觀音勢至ヲ一、又造ルニ織成  
 像ヲ一。・・・以テ二大足元年（A. D. 七〇二）十月二十二日ヲ一神遷ス。春秋六十有二ナリ。・・・（下略）

天寶二年歲次癸未（A. D. 七四三）十二月景寅朔十一日景子建ツ。

初めての試訳に際して註をふるために書き下しを用いることとする。

隆闡法師の碑

大唐實際寺故寺・懷惲奉勅<sup>(三三)</sup>して隆闡大法師を贈られし碑銘並びに序、懷惲書すに及ぶ。

・・・(上略)(隆闡)法師、諱は懷惲、俗は張姓、南陽人なり。・・・(中略)(高宗は)總章元載(A・D・六六八)夢に法師を覩て倏に綸言<sup>(三三)</sup>を降<sup>(三四)</sup>して令を遠ざけて(命令することを避けて)虔(つつし)んで辟(まね)く<sup>(三五)</sup>是に於て(法師は)丹檻<sup>(三六)</sup>に臨み青蒲<sup>(三七)</sup>を邇(ちか)づけ廣く眞誠を獻じて<sup>(三八)</sup>特り哀<sup>(三九)</sup>讃(お褒めの言葉)を蒙る。帝乃ち親しく朱紱(ふつ)<sup>(三〇)</sup>を授け鳳池<sup>(三一)</sup>の榮に處(おか)しむ。師乃ち固く緇(し)衣を<sup>(三二)</sup>請い鸚林<sup>(三三)</sup>の地に託するを願ひ、奉勅して西明(寺)に於て剃落す・・・時に親證三昧<sup>(三四)</sup>大徳・善導闡梨<sup>(三五)</sup>有り。慈樹<sup>(三六)</sup>森疎し(たかくしげり<sup>(三七)</sup>)、悲花<sup>(三八)</sup>照灼<sup>(三九)</sup>す。情の□<sup>(四〇)</sup>有漏を祛<sup>(四一)</sup>(のぞ)き。藤<sup>(四二)</sup>井<sup>(四三)</sup>を蓮臺に擁<sup>(四四)</sup>して寂<sup>(四五)</sup>化無涯<sup>(四六)</sup>なり。鐵圍<sup>(四七)</sup>、寶國<sup>(四八)</sup>に駢せる。既に盛烈<sup>(四九)</sup>を聞き、雅(もとより)<sup>(五〇)</sup>師資<sup>(五一)</sup>を締び<sup>(五二)</sup>解脱の規(のり)を祈り菩提の願を發す。一たび妙旨<sup>(五三)</sup>を承(うけ)て<sup>(五四)</sup>十有餘齡なり。祕偈、眞乘<sup>(五五)</sup>親しく付屬を蒙る。自から薄祐<sup>(五六)</sup>なるを惟い<sup>(五七)</sup>師資早く喪(はろ)ぶ。遺<sup>(五八)</sup>を想ふこと烈(はげ)し<sup>(五九)</sup>而して心崩(やぶ)れ餘恩を顧みて面に雨らし爰(ここ)に宅(すまい)を思ひ圭<sup>(六〇)</sup>墳塋<sup>(六一)</sup>を建つ。遂に<sup>(六二)</sup>鳳城<sup>(六三)</sup>南神和原に於て。靈塔を崇くす。其の地、前は終峯の南鎮<sup>(六四)</sup>、後は帝城の北里なり。・・・塔の側に於て廣く伽藍を構ふ・・・又寺院において大窣堵波塔を造る。周廻二百歩、直上一十三級なり。・・・奉永昌元年(A・D・六八九)勅(みことのり)により法師を徵して<sup>(六五)</sup>寺主と爲す。ここにおいて僧徒<sup>(六六)</sup>を綱紀<sup>(六七)</sup>し釋族<sup>(六八)</sup>を規模<sup>(六九)</sup>し、緇(し)門<sup>(七〇)</sup>濟<sup>(七一)</sup>たり。・・・廣く有縁を勸めて奉じて九重<sup>(七二)</sup>の萬乘<sup>(七三)</sup>に、四生<sup>(七四)</sup>六趣<sup>(七五)</sup>の爲に淨土堂を造る。一所として虬<sup>(七六)</sup>の棟<sup>(七七)</sup>虚を凌<sup>(七八)</sup>せざることなく、虹の梁は<sup>(七九)</sup>架<sup>(八〇)</sup>り、丹檻<sup>(八一)</sup>を廻る。絶<sup>(八二)</sup>き日、青き瓊<sup>(八三)</sup>風を延ぶ・・・圓瑠<sup>(八四)</sup>方鏡の奇<sup>(八五)</sup>人天の巧妙<sup>(八六)</sup>を極め、又堂内に於て阿彌陀佛及び觀音

勢至を造り、又織成<sup>(八七)</sup> 像を造る……大足元年(A・D・七〇二)十月二十二日を以て神遷<sup>(八八)</sup> す春秋<sup>(八九)</sup> 六十有二なり。……(下略)

天寶二年歲次癸(みずのと)未(ひつじ)(A・D・七四三)十二月景<sup>||</sup>丙(ひのえ)寅(とら)朔(ついたち・こよみ)十一日景<sup>||</sup>丙(ひのえ)子(ね)建つ。

次に現代語の試訳をあげておく。

# 隆闡法師の碑

大唐實際寺故寺の(住職)懷惲・天子の命を受けて隆闡大法師という号を贈られる。(その行業の)碑銘ならびに序。懷惲、書す。(懷惲が死したことを自分で書くことはできないのでこの記述は誤刻である。)

……(上略)(隆闡)法師、諱(いみな、生前の名前)は懷惲、出家する前の俗姓は張の姓であり、南陽の人である。……(中略)(高宗は)總章元年(A・D・六六八)夢に(隆闡)法師を見て詔勅をすみやかにくだして、命令することを避けて、謹んで(宮中に)招いた。このときに当たって(法師は)(宮中の)赤い敷居に至って、天子の用いる敷物を近付け、すべてに対して心の真実をささげて、(高宗から)特におおくの称讃の言葉をいただいた。皇帝(高宗)はそこで、自ら赤い宮中の服を授けて宮中に住む栄誉を与えた。法師はそこで固く僧の着る黒い着物を請い極楽浄土の地にゆだねることを願(い宮中に住むことを固辞し)た。天子の命を受けて西明(寺)において剃落した。……その時、自ら念佛三昧を發得した大徳(徳高き僧)の善導阿闍梨(弟子を正しく教え導く高僧)がいた。(善導は)慈しみの大樹は高く茂り、思いやりの花が赤々と燃えさかり、心から煩惱を排除して、(衆生のために)藤の(蔓が下界へ降りている)井戸を(極楽浄土の)蓮華のうてなで抱いて(衆生が蔓を頼りに極楽へ登ってこられるように導き)、奥深い教化は限りなく、(それは)須彌山を中心に九山八海がこれを取りまき、その最も外側の鉄でできた山(地獄が存在する)

さえも駆けめぐっている。極楽浄土においてすでに（多くの衆生を救済して）立派な功績をあげている、（善導と懷惲とは）師僧と弟子の関係を平素から結んで、煩惱から解き放たれるための規則（戒律）を守れるように祈り、悟りを得たいと願う心をおこすように願った。一たび（善導から）この上ない教えを押し戴いて十年以上の歳月がたつてやつと、奥深い秘密の教えや、真実の教えを（善導）自ら伝授された。自ら師の善導が早く遷化してしまったことを不幸なことと思ひ、遺された御教えを思ひおこすことはげいしいものがあつた、そのようなわけで心がやぶれ善導の遺してくれた恩を顧みて、顔を涙でぬらし、ここに（生前の）住まいを思ひおこして丘陵型の墳墓を建立した。とうとう墓地は長安の南において成し遂げられた。これが神和原（地名）に造られ、靈塔を崇く祀り尊んだ。その地の場所は、前は終峯の南の場所で、後は皇帝の城である長安の北の居住地である。・・・塔のかたわらにおいて広い伽藍を構えた・・・又その寺院に大きな塔を造つた。周囲は二百歩、真上は十三重（の塔）である。・・・永昌元年（A・D・六八九）天子の命令により（隆闡）法師を求めて（實際）寺の住職とした。ここにおいて（隆闡法師は）僧たちをおさめ、（また）佛門に帰依した者たちの手本となり、それにより僧侶達も多く集まり立派になつた。・・・幅広く縁ある人びとを勧めて、（その志を）うけて、幾つも重なつた門を有した御殿や、万の乗り物をそろえた皇帝のように偉大になり、迷いの世界のあらゆる生き物、六種の迷いの生物が輪廻する世界を救済する爲に浄土堂を造つた。一所として、龍のような屋根の上を横につらぬいてとおる長い木が虚空を満たさないことなく、虹のようなはりが架けわたされ、赤色の太い柱を巡っている。赤々と輝く日光（のようであり）、青い門にちりばめられた飾りは風を延ばしている。・・・丸く美しい珠や、四角の鏡の珍しい飾りは、人や天の見事な技を極めつくしている。又堂内において、阿彌陀佛及び觀音勢至を造り、又織つた織物から成る像を造りあげた。・・・大足元年（A・D・七〇二）十月二十二日を以て（懷惲は）死を迎えたその年齢は六十二才だつた。・・・（下略）

天寶二年（十干十二支の）年回り・癸（みずのと）未（ひつじ）（A・D・七四三）十二月景Ⅱ丙（ひのえ）寅（とら）のこよみ（朔）の十一日景Ⅱ丙（ひのえ）子（ね）に建立する。

この碑を読んで理解される懷惲に関する年代は、塚本善隆氏の導き出したところと同じく、懷惲が唐の高宗総章元年（A・D・六六八）二十九歳で剃度出家して、善導に十有余年師事し大足元年（A・D・七〇一）十月二十二日、六十二歳で没したと述べられている。そうすると、前述の『浄土宗經論章疏録』において懷感が没した景龍二年（A・D・七〇八）より懷惲の方が先に没したことになる。ところが孟銑の『釋浄土群疑論』序によると、

有<sub>リ</sub>懷惲法師<sub>ト云人</sub>一、惲<sub>ト</sub>與<sub>トハ</sub>二感師一并<sub>ニ</sub>爲<sub>リ</sub>二導公ノ神足一。四禪俱<sub>ニ</sub>寂<sub>ニ</sub>、十勝齊<sub>ク</sub>高<sub>シ</sub>。契悟<sub>ノ</sub>之深<sub>キ</sub>、詎<sub>ナシ</sub>止<sub>タ</sub>同<sub>ク</sub>遊<sub>フ</sub>ノミナランヤ<sub>ニ</sub>。緣習<sub>ノ</sub>之重<sub>キ</sub>寧<sub>ソ</sub>唯<sub>ダ</sub>共<sub>ニ</sub>趣<sub>ク</sub>ノミナランヤ<sub>ニ</sub>一乘<sub>ニ</sub>一。閑歲易<sub>ク</sub>レ掩、長年先<sub>ツ</sub>逝<sub>フ</sub>。三門徒然<sub>ト</sub>、七衆同悲<sub>ム</sub>。惲以<sub>ラク</sub>昌言<sub>ノ</sub>之書、既<sub>ニ</sub>成<sub>レリ</sub>二之<sub>ヲ</sub>於舊友<sub>ニ</sub>一釋疑<sub>ノ</sub>之論、敢<sub>テ</sub>行<sub>ニ</sub>之<sub>ヲ</sub>故人<sub>ニ</sub>一（九〇）

初めての試訳に際して書き下しをあげておくこととする。

懷惲法師と云ふ人有<sub>リ</sub>。惲と感師とは并に導公の神足爲<sub>リ</sub>。四禪俱に寂に、十勝（九一）齊く高し。契悟（九二）の深きこと、なんぞただ同く七淨（九三）に遊ぶのみならんや。緣習（九四）の重きこと寧んぞ唯だ共に一乗に趣くのみならんや。閑歲（九五）掩ひ（九六）易く、長年先づ逝く。三門徒然（九七）として、七衆同く悲む。惲以らく昌言（九八）の書、既に之を舊友に成れり釋疑之論、敢て之を故人に行ふ。

次に現代語の試訳をあげておく。

懷惲法師という人がいる。懷惲と懷感師とはどちらも善導大師のすぐれた弟子である。四段階からなる瞑想を二人とも心静かに（行じ）、十波羅蜜の行は二人とも等しく高い位までのほっている。道を悟ることの深いこと、どうしてただ同くさとり智慧を助ける七種の修行に遊ぶだけであらうか。いやそれだけではない。因縁の法を学ぶことの重い



ことは、どうしてもただ一緒に一乗（法華經）に趣くだけであろうか。いやそれだけではない。一年をおいて続いて隠れられた、まず先に歳の大きい懷感が往生された。寺の中では何もすることができないで、出家している修行僧尼も在家の男女信者も共に悲しんだ。懷惴は以下のことを思った、すばらしい言葉によつて書かれている書物・すでに亡き友となつてしまった（懷感の）『釋疑之論』（『釋淨土群疑論』）を、思い切つて『釋淨土群疑論』を故人のために完成させようと。

と説かれるように、歳の大きい懷感が先に亡くなつて、一年をおいて懷惴が亡くなつたとされている。この記述に依れば、前述の隆闡法師の碑文において、懷惴は「大足元年（A・D・七〇一）十月二十二日を以て神遷す春秋六十有二なり。」と記されるところから大足元年に六十二才で亡くなつてゐる。その一年前に懷感はなくなつたとすれば、久視元年（A・D・七〇〇）が懷感の没年とすることができるといふことができる。この説は未だ誰も述べていない新説であるので以下十分検討したいと思う。

また、『大周刊定衆經目錄』卷第十五において、天冊萬歲元年（A・D・六九五）十月二十六日付の校經目僧の中に懷感の名前が出てゐる。すなわち、

天冊萬歲元年十月二十六日

都檢校刊定目錄及經眞偽佛授記寺大德僧

明佺

大福光寺校經目僧

審言

校經目僧

懷琰

校經目僧

慈訓

校經目僧

懷感（九九）

と記されているように、『大周刊定衆經目錄』の編纂者明佺を筆頭に校訂者の名前が書かれているのである。その中の大福光寺校經目僧の一人として、懷感の名が出ていのである。この懷感が『釋淨土群疑論』の選者と同一人物であるならば、懷感是天冊萬歲元年（A・D・六九五）十月二十六日には生存していたこととなる。この資料から考えても久視元年（A・D・七〇〇）懷感没年と言うことに矛盾はないと考えられる。

しかし、金子寛哉博士は、懷感の没年に関して、別の解釈によって論文を出されている。すなわち『佛教論叢』十二「懷感の伝記について」（二〇〇）によると、前述の孟銑の『釋淨土群疑論』序の「閑歲易<sup>レ</sup>掩、長年先<sup>ツ</sup>逝<sup>ク</sup>」の文を引用して「懷感が懷惲の先輩であつてしかも懷惲より先に逝去した。」と理解し、懷惲が総章元年（A・D・六六八）二十九歳で善導の弟子となる以前から懷感の弟子であり、かつ懷惲よりも年上であつたとして、逆算により、懷感の出生年代をA・D・六三九年以前と定めている。さらに、「閑歲易<sup>レ</sup>掩」の閑の文字は、閑の文字を間違えて書いたものであり、閑は『康熙字典』、『說文解字』、『諸橋大漢和』等の字典によると亥（イドシ）と同じ意味を持つことから、亥歳を前述の『大周刊定衆經目錄』に懷感の名が出ていることを考慮して天冊萬歲元年（A・D・六九五）から懷惲の没年である大足元年（A・D・七〇一）の間に求めて、中宗の嗣聖十六年、則天武后の聖曆二年（A・D・六九九）が懷感の没した年であるとされている。

金子寛哉氏の説は、二〇〇三年九月香港大学教授廖明活氏の『懷感的淨土思想』において

有論者以「外」「亥」音近、認爲「閑」即「閑」<sup>（一）</sup>、「閑歲」當指「亥歲」、從而推論出懷感的卒年爲六九九。參閱成田寛哉（懷感の傳記について―特に没年を中心として―）（二〇一）

と引用されている。ここにおいて注目すべき解説は、「外」と「亥」とが音が近いとすることである。日本人は、形が似

ているから書き間違えるということはあっても音が近いから書き間違えるという発想は出ないが、発音から音の近いものは書き間違えることがあるとする中国人ならではの発想であり、中国においては実際そういう場合が多々あるのであ  
る。また、廖明活氏は同著（二〇二）の中で、『大唐貞元續開元釋教錄』（二〇三）『貞元新定釋教目錄』（二〇四）の中に懷感の  
名が出てきているが、同名の異人であろうとしている。

さて、金子寛哉博士の説と私の説とを比較してみたい。まず最初に注意したいことは、この説は「閑」の文字が「閑」  
の書き間違いではないかという推論から出発しているところである。そこで私は、書き間違いではなかったなら別の読  
み方は出来ないだろうかという発想から出発してみた。すると、「閑」の字は門構えの真ん中に「外」の字が入っている。  
門の隙間から外の様子が垣間見られる会意文字である。『大漢和辞典』によると、これは「間」「間」の古字であるとき  
れている。（二〇五）では、「閑」の字をそのまま「間」に置き換えてみれば、「間歳」と言う熟語となり、「一年をおいて」  
と言う意味となる。その意味で懷感の没年を考察すると、前述のように隆闡法師の碑文において、懷憚は「大足元年（A.  
D・七〇一）十月二十二日を以て神遷す春秋六十有二なり。」と記されるところから大足元年に六十二才で亡くなってい  
る。その一年前に懷感はなくならずれば、久視元年（A・D・七〇〇）が懷感の没年と言うことができる訳である。  
この説から考えると、いままでの金子寛哉博士の読み方では聖暦二年（A・D・六九九）が懷感の没した年であるとき  
れていたが、それより一年遅い久視元年（A・D・七〇〇）が懷感の没年となるのである。

この論について令和元年九月四日、大正大学で開催された浄土宗総合学術大会で、大正大学大学院院長尾光恵氏が『釈  
浄土群疑論序』再考』の発表に於いて以下のように批判していたのでそれについて紹介し、反論したいと思う。

長尾氏の論の要点は次のようなものである。『釋浄土群疑論』序の中で、懷憚が孟銑に序を依頼して、その依頼した本  
人が亡くなったことを序に記してあるのは矛盾であるという趣旨のものであった。これについて、私は次のように考え

る。前述のように、懷感と懷惴は一年をおいて続いて亡くなっている。懷惴の亡くなった年は、隆闡法師の碑文において、「大足元年（A・D・七〇一）十月二十二日を以て神遷す春秋六十有二なり。」と記されるところから大足元年の十月二十二日である。懷感が前年の年末に亡くなれば、約十ヶ月、年始に亡くなったとしても一年十ヶ月の期間しかない。その間に、懷惴は、懷感の葬儀を済ませ、前述の『釋淨土群疑論』序の記載のように、「懷惴は以下のことを思った、すばらしい言葉によって書かれている書物・すでに亡き友となってしまった（懷感の）『釋疑之論』（『釋淨土群疑論』）を、思い切って『釋淨土群疑論』を故人のために完成させよう」と記されているところから、まだ未完成の『釋淨土群疑論』を懷惴が完成させたことになる。その期間を経て、その後完成したものを孟銑に見せて、この書の序を書いてほしいと依頼したわけであるから、最長の期間をとつても、一年十ヶ月近くその仕事に費やしていたことは容易に察することができる。また、孟銑の序は美辭麗句を駆使して書かれていて、特に長文であることから、わずかな時間でできるものとは考えられない。とすれば、孟銑が序を書いている間に懷惴が亡くなったとしても矛盾は無い。懷感と懷惴が一年をおいて無くなったことを孟銑は序の最後に記していることから、このことがよほどショックであったことがうかがえる。さもないければ、序の中に著作者、編集者の死に関するこれをこれほど詳細に書くことは無いと思う。長尾氏への反論として、孟銑が序を執筆中に依頼者の懷惴が亡くなったから、序の中にこれほど詳細な記述がなされたのであると反論する。

## (一)『大正藏經』五一卷一〇六頁A

【和訳】懷感禪師は長安の專福寺に住んでいた。すべての經典に博學であつたが、念佛を信じていなかった。善導和尚に問うて言つた。「念佛とはどのような法門なのか。」と、(善導が)答えて言うには、「君は専ら念佛を称えよ。そうすればきつと自ずからその証しが現れるであらう。」と、又(懷感が)問うて言つた。「思慮を超えた(阿弥陀)佛を見ることが出来るやいなや。」と、師(の善導)は言つた。「佛の言葉をどうして疑うことができないのか、いやできない。」と、とうとう三七日(二十一日間)道場に籠もり念佛を称えたが、まだその行に応じた証しが現れなかつた。(懷感は)自ら自分の罪深きことを恨んで、食を断つて命を終わろうとした。師(の善導)は命を絶つことを許さず三年専ら念佛行を志した。ついに佛の金色に輝く玉の毫相を見ることができ、念佛三昧を証得することができた。そこで(懷感は)自ら『往生決疑論』(『釋淨土群疑論』七卷を造つた。臨終には阿弥陀佛が西方からやつて来て迎えられ、合掌して西に向かつて往生した。

(二) ヒヨウジ 兼持↓兼《音読み》ヘイ/ヒヨウ(ヒヤウ)/ヒン《訓読み》とる《意味》「動」とる。手に持つ。しっかりと持つて守る。「古人秉燭夜遊」古人燭ヲ秉リテ夜遊ブ「↓李白」一名 手ににぎつた権力。《同義語》↓柄。「權秉ケンヘイ」「治國不失秉」國ヲ治ムルニ秉ヲ失ハズ「↓管子」單位 穀物の量をはかる單位。一秉は十六斛コク。「粟ゾク五秉ヘイ」「↓論語」[漢字源]

(三) ガン 捍《音読み》カン/ガン《訓読み》ふせぐ/ゆごて《意味》「動」ふせぐ。盾でふせぐ。かたいもので衝撃をふせぐ。「捍衛キト」一名 ゆごて。弓の弦のはね返りをふせぐため、左手につける防具。[漢字源]

(四) ショウク 精苦 比丘が戒行をまもり修養に努めること。(広) 844

(五) ニュウシン 入神 事物の本質をしっかりと把握し、理想の境地にいきつくこと。転じて、技芸が神わざと思えるほど上達すること。また技芸が非常にすぐれていること。忘我の境地。[漢字源]

(六) ドウコウ 同好 ドウコウ・コノミヲオナジユウス 好みを同じくする人。同じ趣味を持つこと。また、その人。[漢字源]

(七) ハン 泮 溶ける 水が溶ける。

(八) ヌウヨ 猶豫 1. 疑い。ためらい。疑う。いずれとも決定しないで、ぐずぐずすること。もともと猶も予も、疑い深い獣のことをさすとされる。2. インドの大神の唱えた異議の五か条(五事)の一つ。阿羅漢でもなお疑問をいだくことがあるということ。3. 因明では、疑わしくて明白でないこと。疑わしくていずれともはっきり決定されていないこと。(広) 1600a

(九) ビョウボウ 渺茫 広くはてしないさま。遠くかすかなさま。『渺漫ビョウマン・渺瀰ビョウビ』「一別、音容両渺茫」一別、音容ハ両ツナガラ渺茫タリ」(↓白居易)「漢字源」

(二〇) ケイ 詣《音読み》ケイ/ゲ/ゲイ《訓読み》いたる/もうづ《意味》「動」いたる。高い所までいきつく。到着する。『形』学問などが高い境地にまでいつているさま。『造詣、きん』「漢字源」

(二一) ケン 虔《音読み》ケン/ゲン《訓読み》かたい(かたし)/つつしむ/しいる(しふ)《意味》「動・形」かたい(きん)。ひきしまっている。ゆるみがない。かっちりとしめる。『奪攘矯虔ダツジヨウキヨウケン(あるものをうばって、がっちり守る)』(↓書経)「動・形・名」つつしむ。緊張してつつしみ深くする。かたくなるしい。くそまじめな心や態度。『敬虔ケイケン』「虔ト於先君也」ツツシンデ先君ニトスルナリ」(↓左伝)「動・名」しいる(シフ)。むりじいする。むりにとる。転じて、強盗をいう。

「虔劉ケンリユウ」「漢字源」

(二二) コウ 構《音読み》コウ/ク《訓読み》かまえる(かまふ)《意味》「動」かまえる(カマフ)。組み立てる。しだいにつくり出す。いろいろと考えて、しくむ。『同義語』↓構。『構患』患ヒヲ構フ「構兵」兵ヲ構フ「構怨於諸侯」怨ミヲ諸侯ニ構フ」(↓孟子)「動」次々と波及して抜け出せない。かかずらう。『類義語』↓拘。『漢字源』

(二三) ケン 愆《音読み》ケン《訓読み》あやまつ/たがう(たがふ)/あやまち《意味》「動」あやまつ。たがう(タガフ)。物事の本道から横にはみ出る。『類義語』↓違・↓差。『愆期』期ニ愆フ(↓詩経) 名 あやまち。物事のやりそこない。『罪愆ザイケン』「侍於君子有三愆」君子ニ侍ルニ三愆有リ」(↓論語) ケンス・ケンアリ「動」ふとしたことから病気になる。『王愆于厥身』王ソノ身ニ愆アリ」(↓左伝)「漢字源」

(二四) 『大正藏經』五〇卷七三八頁C

(二五) 『大正藏經』四九卷二七六頁C

(一六)『大正藏經』五一卷一三三頁C

(一七)望月信亨擬講校訂『淨土宗經論章疏錄』上卷十八丁右

(一八)『淨土宗全書』続九卷一九一頁B

(一九)『佛教學』二二七「金石文に見えたる善導と道綽」塚本善隆

(二〇)『金石萃編』八六卷一二丁左二〇丁右 なお、隆闡法師の碑文を解説するのについて、名古屋大学大学院中国人留学生・耿心竹氏に協力いただいたことに感謝申し上げます。

(二一)牧田諦亮著『淨土佛教の思想』五・善導 三〇～四二頁 下線部は牧田博士が補って読んだ部分である。

(二二)『奉勅』ホウチョク 天子の命令を受ける。〔漢字源〕

(二三)詔勅のことを、「綸言リンゲン」という。〔漢字源〕

(二四)倏降 すみやかに「諸橋」くだす。

(二五)「辟」めす。まねく。諸橋十卷一〇七七C

(二六)【丹】《常用音訓》タン《音読み》タン《訓読み》に／あかい(あかし)《名付け》あか・あかし・あきら・に・まこと《意味》石 水銀と硫黄イオウの化合物。「丹砂タンシャ」といい、あかい結晶をして、地中から出る。水銀の原料、顔料、薬の材料となる。【名】に。丹砂を溶いた朱色の絵の具。また、あかい口紅。「丹青タンセイ」【名】丹砂を配合して強精剤・興奮剤とした薬。のち、広く、練りあげた薬をいう。「煉丹レンタン」「丹薬」【形】あかい(アカシ)。朱色の。「丹華」【名】真心。「丹心」〔漢字源〕丹檻 赤い敷居

(二七)【青蒲】セイホ 青いがま。青いがまで編んだ、天子の用いる敷物。あおむしろ。〔漢字源〕

(二八)【献】旧字《常用音訓》ケン／コン《音読み》ケン／コン《訓読み》たてまつる《名付け》すすむ・たけ・ただす・のぶ《意味》ケンズ《動》たてまつる。神前や目上の人に、ていねいに物をささげる。さしあげる。《類義語》↓薦・↓上。「献上」「献策」「策ヲ献ズ」「献禽以祭社」「禽ヲ献ジテモツテ社ヲ祭ル」(↓周礼)ケンズ《動》客に酒をすすめる。《対語》↓酢(客が主人に返杯する)。《類義語》↓酬。「献酬ケンシユウ」(酒杯をやりとりする)「或献或酢」或イハ献ジ或イハ酢ス」(↓詩経)「動・形

前に進み出る。先頭におし出したさま。「献春」「献歳」「名」もの知りで賢い人。〈類義語〉↓賢。「文献（文書と記憶のよいもの）知。転じて記録をとどめた文書」「文献不足故也」「文献足ラザルガユナリ」（↓論語）「漢字源」

(二九) 衰 ほう あつめる おおい

(三〇) 朱紵<sup>しゆぢう</sup> 赤いまつりの服。紵は帯、印鑑の意あり。

(三一) 鳳池<sup>ほうち</sup> ホウチ 宮中内にある池の名。「鳳凰池ホウオウチ」中書省、また、宰相のこと。▽鳳池のそばに、中書省があつたことから。宮中のこと。「漢字源」

(三二) 緇衣<sup>しやくい</sup> シイクロい着物。（↓論語）「緇衣之宜兮」緇衣ノ宜シキ（↓詩経）僧の衣。転じて僧。「漢字源」

(三三) 鸚<sup>ひん</sup> 《音読み》オウ（アウ）／ヨウ（ヤウ）／イン 《意味》「鸚鵡オウム」とは、熱帯地方に産する鳥の名。くちばしは短く太くまがつている。舌は厚くて柔らかい。よく人のことばをまねる。「鸚鵡オウラ」とは、おうむ貝。「漢字源」鸚鵡 おうりん 鸚鵡の居る林 極楽浄土の意味。極楽の鳥は佛法を述べる。

(三四) 親證三昧 親しく三昧を証する意味。親しくは自らの意。

(三五) ジャリ 閼梨 阿閼梨<sup>(s. aranya)</sup>の音写)の略。教授、師範、正行などと意訳する。弟子を正しく教え導く高僧に対する敬称。導師、貴僧と言うほどの意味。禅門では修行経歴が五年以上の僧をいう。(広) 七五〇b

(三六) ジュ 樹 樹木、特に心霊が宿っていると考えられた大樹。(広) 七五四b

(三七) 疎<sup>そ</sup> 【疎】異体字《常用音訓》ソ／うと・い／うと・む 《音読み》ソ／シヨ 《訓読み》まばら／うとい（うとし）／うとんずる（うとんず）／うとむ／とおす（とほす）／とおる（とほる）／くしけづる（くしけづる）／くし 《意味》「形」まばら。一つずつ離れているさま。《同義語》↓疏。《対語》↓密。「疎散」「天網恢恢、疎而不失」「天網恢恢、疎ナレドモ失ハズ」（↓老子）「形・名」うとい（ウトシ）。すきまがあいていて離れているさま。また、親密でないさま。近づきの少ない人。疎遠な人。《同義語》↓疏。《対語》↓親（したしい）。「疎遠」「疎客」「去者日以疎」「去ル者ハ日ニモツテ疎シ」（↓古詩十九首）「動」うとんずる（ウトンズ）。うとむ。すきまをおく。精神的に離れて親しくない。《同義語》↓疏。「疎外」「ソス」動とおす（トホス）。とおる（トホル）。ふさがった所を、わけ離してとおす。水をわけて引く。《同義語》↓疏。「疎水」「疎泉」「泉ヲ疎ス」「禹疏（＝疎）九





味』「形」とい(サトシ)。奥深くまで目のきくさま。〈同義語〉↓睿。〈類義語〉↓鋭。『叡智エイチ』「形」天子に関することを尊んでいうときのことば。〈同義語〉↓睿。『叡覧エイラン』『叡感エイカン』『漢字源』

(四五)『無崖』無限ムゲン・カギリナシ 限りがないこと。〈対語〉有限。『無崖ムガイ・無涯ムガイ・ハテナシ・無際ムサイ』『漢字源』

(四六) テツチセン 鐵圀山 鉄輪圀山ともいう。佛教の世界説では、須彌山を中心に九山八海がこれを取りまくが、その最も外側の鉄でできた山をいい、さらにその外界中にあるのが、われわれの住む世界である閻浮提洲であるとする。また三千世界おのおのを一つの鐵圀山が圀むという説もある。玄奘は鉄輪圀山と訳す。(広) 一二〇七b-c

(四七) ホウコク 寶國 極楽浄土の異名 (広) 一五〇四b

(四八)『盛烈セイレッツ』『盛功』セイコウ 功績。『盛烈セイレッツ』『漢字源』

(四九)『師資』シシ 先生。▽「資」は、たすけること。師とでし。〔佛〕師僧とでし。〔漢字源』

(五〇)『雅』《常用音訓》ガ《音読み》ガ／ゲ／エ／ア《訓読み》みやびやか(みやびやかなり)／もとより／からす《名付け》ただ・ただし・つね・なり・のり・ひとし・まさ・まさし・まさり・まさる・みやび・もと《意味》「形」みやびやか(ミヤビヤカナリ)。かどがとれて上品なさま。正統の。都めいた。〈対語〉↓俗・↓鄙ヒ(ひなびた)。「風雅」「雅語」《名》都めいた上品な音楽や歌。「雅声」《名》「詩経」の中の、都びとの歌。▽正雅と変雅、また、大雅と小雅にわける。「形」相手を尊敬してその人の言行や詩文につけることば。「雅囑ガシヨク(あなたのお言いつけ)」《名》上品で由緒正しいことば。また、古典語を解説したことば集のこと。また、その一つである「爾雅」のこと。「広雅」《形》平素から使われているさま。また、いいなれているさま。「雅素(平素)」「子所雅言」子ノ雅言スル所(↓論語)「副」もとより。平素から。もともと。「雅不欲属沛公」雅ヨリ沛公ニ属スルヲ欲セズ(↓漢書)《名》からす。アアとなくからす。〈同義語〉↓鴉ア。〔漢字源』

(五一)『縮』《常用音訓》テイ／し…まる／し…める《音読み》テイ／ダイ《訓読み》しめる(しむ)／むすぶ／しめる／しめ《意味》「動」しめる(シム)。むすぶ。ひもでまとめてしめくくる。また、とけないように約束をむすぶ。〈類義語〉↓結。「縮結」「縮交」〔漢字源』

〔五二〕「妙旨」ミヨウシ ことばに出していえないほどすばらしい趣。『妙趣ミヨウシユ』〔漢字源〕

〔五三〕「承」《常用音訓》シヨウ／うけたまわる。《音読み》シヨウ／ジヨウ《訓読み》うける（うく）／うけたまわる（うけたまはる）《名付け》うけ・こと・すけ・つぎ・つぐ・よし《意味》「動」うける（ウク）。両手で上にささげてうける。「奉承（おし）ただく。転じて相手の意を迎えてへつらう」。「寡人願安承教」寡人願ハクハ安ンジテ教ヘヲ承ケン（↓孟子）「動」うける（ウク）。引き継ぐ。うけ継ぐ。「継承」承前啓後前ヲ承ケ後ヲ啓ク「承先人後」先人ノ後ヲ承ク（↓韓愈）「動」うける（ウク）。うけたまわる（ウケタマハル）。相手の意にそつて、引きうける。「承諾」「承飲」飲ヲ承ク「漢字源」

〔趣〕めざすところ。また、その方向をめざすわけ。ねらい。「趣旨」「指趣」「意趣」〔漢字源〕

〔五四〕シンジヨウ 眞乗 一・眞実の教え。二・佛乗。佛の正法。三・実大乘をいう。（広）九五八b

〔五五〕ハクユウ 薄祐 天のたすけが薄い。不幸。（諸橋）九卷九三七頁A

〔五六〕「惟」《音読み》イ／ユイ《訓読み》おもう（おもふ）／これ／ただ《名付け》あり・これ・ただ・たもつ・のぶ・よし《意味》「動」おもう（オモフ）。心をもつばらある点に注ぐ。よく考えてみる。「思惟シイ・シユイ」「伏惟」伏シテ惟フニ「指」これ。これとさし示すことば。▽語調を転じて、強調をあらわすことば。《同義語》↓維。《類義語》↓是・↓此。「其命惟新」ソノ命、コレ新タナリ（↓孟子）「副」ただ。ただそれだけ。▽漢文では「ただ：のみ」「ただ：のままならん」のように訓読する。《同義語》↓唯。「惟士為能」タダ士ノミヨクストナス（↓孟子）「惟意所適」タダ意ノ適スル所ノママナラン（↓司馬光）〔漢字源〕

〔五七〕「遺」《常用音訓》イ／ユイ《音読み》イ／ユイ《訓読み》わすれる（わする）／のこす／のこる／すてる（すつ）／おくる《名付け》おく《意味》「動・名」わすれる（ワスル）。置きわすれる。とりのこしていつてしまふ。わすれ物。「遺失」「遺忘」「動・名」のこす。のこる。すてる（スツ）。あとにのこす。また、あとにのこる。置き去りにする。とりのこした物。とりこぼし。「遺言」「遺産」「拾遺（とりのこしたものをあつめる）」「遺公子糾不能死、怏也」公子糾ヲ遺テ死スルコトアタハザリシハ、怏ナリ（↓史記）イス小便をもらす。「小遺殿上」殿上ニ小遺ス（↓漢書）「動」おくる。人にとどけてやる。▽饋に当てた用法。

去声に読む。《類義語》↓贈。「遺贈」「因遺戎輜一卷書」「因ツテ戎輜一卷ノ書ヲ遺ル」(↓李賀)「動 おくる。与えてくれる。プ  
ラスしてくれる。▽去声に読む。「遺遺イイ」とは、長くあとをひくさま。また、斜めにずれて続くさま。」「漢字源」

(五八)【烈】《常用音訓》レッツ《音読み》レッツ／レチ《訓読み》はげしい(はげし)《名付け》あきら・いさお・たけ・たけし・つよ・  
つら・やす・よし《意味》「形 はげしい(ハゲシ)。火が勢いよく燃えさかるさま。また、燃えさかる火のようににはげしいさま。  
《類義語》↓猛。「烈火」「風烈(風がひどい、ひどい風)」「於今為烈」「今ニオイテ烈シトナス」(↓孟子)「形 行いや精神が強  
きびしいさま。「忠烈」「烈士」《名 目を見はるようなりつばな業績。めざましいてがら。「功烈」「文謨武烈」ブンボブレッツ(周の  
文王の周到な政略や、武王のめざましい武功)」「漢字源」

(五九)【丘】《常用音訓》キュウ／おか《音読み》キュウ(キウ)／ク《訓読み》おか(をか)《名付け》お・おか・たか・たかし《意  
味》《名 おか(ヲカ)。小高い所。「丘陵」《名 小高く土盛りをした墓。塚キ。「墳丘」《形 おかのように大きい。「丘嫂」キュウ  
ソウ(あによめに対する敬称)「名 周代の土地区画で、八家を「井」、四井を「邑」ユウ、四邑を「丘」という。百二十八家。  
「丘民」《名 孔子の名、孔丘コウキュウの略称。」「漢字源」

(六〇)【式】《常用音訓》シキ《音読み》シキ／シヨク《訓読み》のり／もちある(もちふ)／もって《名付け》つね・の  
り・もち《意味》《名 のり。決まり。また、一定のやり方。《類義語》↓則。「法式」「抱一為天下式」「一ヲ抱イテ天下ノ式トナ  
ル」(↓老子)《名 決まった型。「様式」《名 型通り行う作法や行事。「閔兵式」《名 計算のしかたを示す型。「算式」《名 乗っ  
た人が寄りかかるための車の手すり。《同義語》↓軾シヨク。シヨクス《動 車の手すりに寄りかかる。また手すりに寄りかかっ  
て頭を下げあいさつする。《同義語》↓軾シヨク。「夫子式而聴之」「夫子式シテコレヲ聴ク」(↓礼記)《動 もちある(モチキル・  
モチフ)。何かでもって仕事をする。《類義語》↓以。「式穀似之」「穀キヲ式キテコレニ似セシメン」(↓詩経)《助 もって。語調  
をととのえる助辞。「詩経」で用い、特に訓読しないことが多い。「式微」「式テ微フ」「式歌且舞」「式テ歌ヒ且ツ舞フ」(↓詩経)

〔漢字源〕

(六一)【塋】《音読み》エイ／ヨウ(ヤウ)《訓読み》はか《意味》《名 はか。周囲をぐるりと区切った墓地。「塋封」ヒキ(墓の土盛り)「

〔漢字源〕

〔六二〕【鳳城】ホウジョウ宮城。天子のいる都。▽もと、長安（丹鳳城）をさしていったことば「漢字源」

〔六三〕【遂】《常用音訓》スイ／とゞける《音読み》スイ／ズイ《訓読み》とげる（とぐ）／ついに（つひに）《名付け》かつ・つく・つぐ・とげる・なり・なる・みち・もろ・やす・ゆき・より《意味》動とげる（トグ）。道すじをたどって奥までたどりつく。いける所までいく。また、物事をやりとげる。「完遂」「遂事（やりとげたこと）」「遂我所願（我が願ふ所ヲ遂グ）（↓宋書）」「動とげる（トグ）。一定の方向にそつてすらと進む。また、すすくとそだつ。「遂意（思う方向に進む）」「遂字（のびのびと育ちふえる）」「氣衰則生物不遂（氣衰フレバスナハチ生物遂ゲズ）（↓礼記）」「副 ついに（ツヒニ）。たどりついたさいごに。とうとう。《類義語》↓終・↓竟。「遂取其田里（遂ニソノ田里ヲ収ム）（↓孟子）」「名 遠い道をたどっていきつく地。周の行政区画では、都から百里以上離れた地。「遂方」『漢字源』

〔六四〕【鎮】《常用音訓》チン／しずまる／しずめる《音読み》チン《訓読み》しずまる／しずめる（しづむ）／しずめ（しづめ）／つねに《名付け》おさむ・しげ・しず・しずむ・しずめ・しん・たね・つね・なか・まさ・まもる・やす・やすし《意味》「動しずめる（シヅム）。重みをかけて、ずつしりとおさえる。「鎮庄」「鎮撫其民人（ソノ民人ヲ鎮撫ス）（↓左伝）」「名 しずめ（シヅメ）。上から重みをかけるもの。おもし。おさえ。「文鎮（紙をおさえる重し）」「重鎮」「名 地方のおさえとなる軍隊。またその軍隊の長官。清々代には軍団を鎮という。▽平声に読む。「鎮台」「藩鎮ハンチン（地方をしずめる軍政の長官）」「名 地方の中心となる大きな町。旧制では人口五万人以上の町。▽「鎮」という地名となる。「副 つねに。ずつしりと腰をすえて。いつまでも。とこしえに。「春光鎮（人空老）春光ハ鎮ニ在ルニ、人ハ空シク老ユ」「動 いっぱいにつめる。▽填テン（いっぱいにつめる）に当てた用法。テンと読む。「充鎮ジュウテン（「充填」「形（俗）じゅう。わくいっぱいになったさま。「鎮日チエンリー（一日じゅう）」「漢字源」

〔六五〕【徴】《常用音訓》チヨウ《音読み》チヨウ／チ《訓読み》めす／もとめる（もとむ）／きざす／きざし《名付け》あき・あきら・おと・きよし・すみ・なり・みる・もと・よし《意味》チヨウス「動」めす。隠れている人材をめし出す。「徴召」「徴為常侍（徴シテ常侍ト為ス）（↓枕中記）チヨウス「動」もとめる（モトム）。人民などから取りたてる。また、要求する。《類義語》↓征。「徴兵」「徴歌（歌ヲ徴ス）」「吾以羽檄徵天下兵（吾羽檄ヲモツテ天下ノ兵ヲ徴ス）（↓漢書）チヨウス「動 物事の表面に

出たところを見てとる。手がかりを得る。〈類義語〉↓証。「宋不足徴也」宋ハ徴スルニ足ラザルナリ」(↓論語)「動」きざす。物事のけはいが表面に少し浮かび出る。〈類義語〉↓現・↓発。「徴於色発於声」色ニ徴シ、声ニ発ル」(↓孟子)「名」きざし。物事の起こるのを予想させるしるし。「徴候(=兆候)」「納徴(結婚の結納をする)」(名)五音の一つ。▽宮・商・角・徴チ・羽を五音という。〔漢字源〕

(六六) ソウト 僧徒 修行僧たち。衆僧。僧衆におなじ。(広) 一〇七五d

(六七) 【綱紀】<sup>ミヤ</sup>大きい綱と小さい綱。転じて、国家をおさめる大きい法律と細かい法則。〈類義語〉紀綱。国をおさめる。「勉勉我王、綱紀四方」勉勉タル我が王、四方ニ綱紀ス」(↓詩経)官名。州の事務をとりまとめる主簿<sup>ミヤ</sup>の別名。〔漢字源〕

(六八) シャクゾク 釋族 佛門に帰依した者。

(六九) キボ 規模 一、ものの手本。【解釈例】規はぶんまはしと読む字なり。丸も角もぶんまはしで出来るなり。仍て「ノリ」と云ふ。物の間違はぬをのりと云ふなり。模の字も「ノリ」と読む。鋳型と読む。物の手本になる。浄土真宗の物の手本と云ふは教行信証の四法なり。二、やり方。三、名譽。(広) 二六九c

(七〇) シモン 緇門 緇衣を着る僧侶の一門の意。佛門のこと。(広) 七二四a

(七一) 「済済セイセイ・サイサイ」とは、数多くそろっていてりつぱなさま。「済済多士」済済タル多士」(↓詩経)〔漢字源〕

(七二) キウチヨウ 九重 いくつにも重なっていること。ここのえ。天子の御殿のこと。ここのえ。▽いくつも重なって門があることから。「九重城闕煙塵生」九重ノ城闕煙塵生ズ」(↓白居易)天。〔漢字源〕

(七三) バンジョウ 萬乗 一、一万の兵車。二、兵車一万を出し得る広さの土地。三、萬乗の土地を有する君主。天子。四、年号

〔諸橋大漢和〕九卷七四七b

(七四) シシヨウ 四生 迷いの世界のあらゆる生き物。

(七五) ロクシユ 六趣 六道に同じ。六つの帰趨。趣はおもむき住む所。衆生が業によって輪廻する六種の世界。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上。生き物が輪廻する世界の六区分。五衆の説もあるが、特に犢子部は六種の説を主張した。(広) 一七六五b

(七六) 虬 ミズチ 龍の子で両角のあるもの。角のない龍。龍。〔諸橋大漢和〕十卷一b

(七七) 【棟】《常用音訓》トウ／むな／むね《音読み》トウ／ツ／ツウ《訓読み》むな／むなぎ／むね／かしら《名付け》すけ・たか・たかし・みね・むなぎ・むね《意味》一名 むなぎ。屋根の上を横につらぬいてとおる長い木。一名 むね。家の最も高い所。屋根の面と面が交わる所。一名 かしら。主要な人物。おさ。▽まん中を通るしん棒の意から。「棟梁トウリヨウ」一名 星の名。大角。〔漢字源〕

(七八) 【凌】《音読み》リヨウ《訓読み》しのぐ／こえる（こゆ）《名付け》しのぐ《意味》動・形 しのぐ。力をこめてむりに相手の上に出る。力ずくでおかす。激しい力のこもったさま。《同義語》↓陵。「凌駕リヨウガ」「凌辱リヨウジヨク」動 こえる（コユ）。むりをして高山や危険をこえる。《同義語》↓陵。「今陛下好凌阻險、射猛獸」今陛下好ンデ阻險ヲ凌エ、猛獸ヲ射ル（↓司馬相如）一名 氷を透かして見える氷の中の筋目。転じて、美しい氷。「冰凌ヒヨウリヨウ」「凌陰リヨウイン」とは、天然氷をしまっておくへや。〔↓詩経〕〔漢字源〕

(七九) 【梁】《音読み》リヨウ（リヤウ）／ロウ（ラウ）《訓読み》はし／はり／うつぱり／やな《意味》一名 はし。左右の兩岸に支柱をたて、その上にかけた木のはし「橋梁キョウリヨウ」一名 はり。うつぱり。二本の支柱で屋根をささえる材。「棟梁トウリヨウ」一名 やな。川の瀬の兩岸からくいをうち、水を中央のひと所に集めて、すのこをして魚をとる装置。「母逝我梁」我が梁ニ逝クナカレ〔↓詩経〕一名 物の中央の突起している部分。▽橋や、はりのように高くかかっていることから。「鼻梁ビリヨウ」一名 王朝名。（イ）南北朝時代、南朝の一つ。蕭衍ショウエンが齊セイを滅ぼしてたてた。四代五十六年で陳チンに滅ぼされた。五〇二―五五七（ロ）五代の一つ。朱全忠が唐を滅ぼしてたてた。二代十七年で後唐コウトウに滅ぼされた。「後梁コウリヨウ」とも。九〇七―九二三（名）国名。戦国時代、魏ギの別名。戦国の七雄の一つ。前四〇三―前二二五▽恵王のとき都を大梁ダイリヨウ（今の開封市）に移してからの称。〔漢字源〕

(八〇) 【架】《常用音訓》カ／か／かる／か／ける《音読み》カ／ケ《訓読み》かかる／たな／かける（かく）《名付け》みつ《意味》一名 たな。支えの上につけわたしたたな。また、支柱の上につけてわたす横棒や橋げた。《類義語》↓棚等（たな）。「書架（本だな）」「衣架（ころもかけ）」「カス（動）かける（カク）。上にのせかける。かけわたす。上にのせかけて組みたてる。」「屋上架屋」「屋上屋ヲ架ス」「架空（土台なしで上にのせる↓うそ）」「架詞（詞ヲ架ス）」一名 のせぎ。かせ。▽枷ぎに当てた用法。〔単位〕



二つの支柱に乗せた横木の長さ、また、高くかけ渡した道具、支柱を使って組みたてた機械などをかぞえる単位。〔類義語〕↓  
台。「五架」〔漢字源〕

(八一)【楹】《音読み》エイ／ヨウ(ヤウ)《訓読み》はしら《意味》〔名〕はしら。天井と床の間にはった太いはしら。〔単位〕家屋を数えるのに用いることば。家屋一列を「一楹イチエイ」という。〔漢字源〕

(八二) 艶 キョク・コキ カク キヤク 一・あか 赤い色。濃い赤。二・赤いさま。三・美山の赤いさま。四・あをぐろい色。五・おそれる。六・怒るさま。七・叶に通ず。〔諸橋大漢和〕一〇一八二五b

(八三) 璣 サウ ソウ サ 一・玉に似た石。二・玉の鳴る音。三・宮門にちりばめられた飾り。転じて、君を称するには直接には斥言するを避けて霊璣といふ。四・物のさま。少ないさま。猥屑のさま。経を誦える声。

(八四) 瑠 タウ 一・みみだま。みみわ。耳飾り。二・冠の飾。金玉を用いて作り、冠の前に当てる飾り。三・たま。美しい珠。四・たるきの端の玉飾り。五・佩玉(帯や胸につける飾りの玉〔漢字源〕の音のさま。六・琅瑤(ろうとう)は鈴の音。七・琅瑤はくさり。八・耳瑤は草の名。なもみ。九・當に通ず。一〇・鑑に通ず。〔諸橋大漢和〕七九七三a-b

(八五)【奇】《常用音訓》キ《音読み》キ／ギ／キ《訓読み》くし／めづらしい(めづらし)／あやしい(あやし)《名付け》あや・くし・くす・すく・より《意味》ヤミ〔形〕くし。めづらしい(メヅラシ)。普通のようにすからかけ離れているさま。風変わりなさま。《対語》↓常・↓凡。「奇抜」「奇景」「山色空濛雨亦奇」「山色空濛トシテ雨マタ奇ナリ」(↓蘇軾)〔形・名〕あやしい(アヤシ)。不思議なさま。常識からかけはなれたもの。「奇怪」キトス〔動〕めづらしいと認める。非凡だと思う。「大奇之」大イニコレヲ奇トス〔名〕めづらしい考え。意想外の計画。「奇計」「武臣用奇」「武臣奇ヲ用フ」(↓李華)〔名〕二で割り切れない整数。《対語》↓偶。「奇数」〔名・形〕二で割り切れない数。はんばな数。また、はんばである。《同義語》↓畸。「百十有奇(百十あまり)」「数奇」とは、運命がちぐはぐで不運であること。〔漢字源〕

(八六)【巧妙】コウミョウじょうずでみごとなこと。非常にじょうずなこと。〔漢字源〕

(八七)【織成】シヨクセイ織つて織物をつくり出す。転じて、物をつくり出すこと。模様織りの織物。〔漢字源〕

(八八) 神遷 シンセン 死をいふ。かむさる。〔諸橋大漢和〕四五四d



〔八九〕【春秋】シュンジュウ 春と秋。年月。〔類義語〕夏臘カロウ。転じて、年齢。〔↓楚辞〕〔漢字源〕

〔九〇〕寶永版『釋淨土群疑論』巻序三帖

〔九一〕ジッシヨウギョウ 十勝行 涅槃の彼岸に至るために修する十のすぐれた行。菩薩が十地において修する十波羅蜜をいう。十度ともいう。(広) 六九九d

ジツバラミツ 十波羅蜜 一、六波羅蜜に、方便・願・力・智の四波羅蜜を加えたものをいう。菩薩の実践すべき徳目である。『華嚴經』十地品や『成唯識論』に説く。(一) 方便波羅蜜。種々の間接的な手段によって、智慧を導き出すこと。(二) 願波羅蜜。常に誓願をたもち、それを実現すること。(三) 力波羅蜜。善行を実践する力と、真偽を判別する力を養うこと。(四) 智波羅蜜。ありのままに一切の真実を見とおす智慧を養うことをいう。二、唯識説では、この十波羅蜜を菩薩の十地において順次に修行するものとし、これを十勝行と名づける。三、密教ではこの十波羅蜜を十菩薩とし、これを胎藏界曼荼羅虚空蔵院に安置する。四、密教において、印相を示すときに用いる両手十指の異名。(広) 七〇四c-d

〔九二〕カイゴ 契悟 契は心性にかなう、悟はさとる、の意。道をさとること。真理にかないさとること。契心証会。大悟。自己の胸中の分別妄想を脱却して真理をさとること。(広) 一八〇D

〔九三〕シチジョウ 七淨 七淨華 七華 七覺支 又七種淨なり。『維摩詰所説經』「八解之浴池。定水湛然滿。布以七淨華。浴此無垢人」『羅什註』「一に戒淨、心口所作清淨。二に心淨、斷煩惱心清淨。三に見淨、見法眞性不起妄想。四に度疑淨、眞見深斷疑。五に分別道淨、分別是道非道。六に行斷知見淨、知見所行善法與所斷惡法而清淨分明。七涅槃淨、證得涅槃遠離諸垢。」『織田佛教大辞典』七二九b-c

シチカクシ 七覺支 さとりを得るために役立つ七つの事がらの意。心の状態に應じて存在を観察する上での注意・方法を七種にまとめたもの。七つのさとりに役立つもの。さとりに導く七つの項目。さとりの智慧を助ける七種の修行。(一) 正法覺支。教えの中から真実なるものを選びとり、偽りのものを捨てる。(二) 精進覺支。一心に努力する。(三) 喜覺支。真実の教えを実行する喜びに住する。(四) 輕安覺支。心身をかるやかに快適にする。(五) 捨覺支。対象へのとらわれを捨てる。(六) 定覺支。心を集中して乱さない。(七) 念覺支。おもいつづけること。『俱舍論』『維摩經』『辨中邊論』(広) 六八五A

(九四) エンジュウ 縁習 因縁の法を学ぶ事。意識。

(九五) 閑＝間＝間の古字〔諸橋大漢和〕十一七三八A カンサイ閑＝間歳 中一年を隔てる。一年おき。隔年。〔諸橋大漢和〕十一七三〇b あいだに一年おいて、次の年ごとに。一年おき。隔年に。〔漢字源〕

(九六) オオウ 掩《音読み》エン(エム)《訓読み》おおう(おほふ)／かくす《意味》「動」おおう(オホフ)。上からおおい隠す。おさえる。「掩耳＝耳ヲ掩フ」「掩泣エンキユウ(しのび泣く)」「君王掩面救不得＝君王、面ヲ掩ヒテ救ヒエズ」(↓白居易)「動」おおう(オホフ)。ふさぎ閉じる。「掩門＝門ヲ掩フ」動 かくす。目だたないようにかくす。「掩蔽エンペイ」「掩襲エンシュウ(姿をかくして奇襲する)」「漢字源」

(九七) トゼン 徒然 何もすることがなくて、たいくつなさま。何もしないで、じっとしているさま。あてもなく、いたずらに。ツレツレ〔国〕何もすることがなくて、たいくつなさま。〔漢字源〕

シチシュ 七衆 佛教徒の集団を構成する七種類の人びと。比丘(bhikṣu 修行僧)・比丘尼(bhikṣuṇī 尼、女性の修行者)・優婆塞(upāsaka 信士、在俗信者)・優婆夷(upāṣiṭā 信女、女性の在俗信者)の四者を四衆というが、前二者は具足戒を受けた出家の専門修行者であり、後二者は在家の佛教徒であって、五戒を守る者。また、出家のうち男の未成年者を沙弥(samāṇera 小僧)、女のそれを沙弥尼(samāṇerī)といい、特に女性の場合は、沙弥尼と比丘尼の中間に式叉摩那(śīṣamāṇā)を設ける。これらすべてを合わせて七衆という。佛教者のつどい。【解釈例】比丘・比丘尼・式叉摩那・沙弥・沙弥尼を五衆という。これに優婆塞・優婆夷を加えて七衆というなり。(広) 六八六b

(九八) ショウゴン 昌言 ショウゲンリつばなことば。公明正大なことば。美言。〔禹拝昌言＝禹昌言ヲ拝ス〕(↓書経)書名。〔漢字源〕

(九九) 『大正藏經』五五卷四七五頁 a b

(一〇〇) 『佛教論叢』一二卷一六三頁一六六頁「懷感の伝記について」成田寛哉

(一〇一) 香港大学教授廖明活著『懷感的淨土思想』六頁

(一〇二) 香港大学教授廖明活著『懷感的淨土思想』七頁

(一〇三) 『大正藏經』 五五卷七五一頁b、七五二頁b

(一〇四) 『大正藏經』 五五卷八八四頁c

(一〇五) 閑々問々問の古字〔諸橋大漢和〕十一・七三八A

キーワード 懷感、生没年代、序文、孟銑

(むらかみ しんずい 東海学園大学共生文化研究所 研究員)